

主 題：キリストのすばらしさを知った人生 2

聖書箇所：ピリピ人への手紙 3章10-16節

前回から私たちは「キリストのすばらしさを知った人生とはいったいどういうものなのか？」ということについて考え始めました。そのことを特にパウロの人生を通して見始めました。先週のことを少し思い出してみてください。人間的に見れば価値のありそうなもの、すばらしいと見えるものを持っていたパウロ、彼自身が価値があると思いついていただけではなく、だれが見ても価値があると思う、そのようなものをすべて持っていたパウロ。そんなパウロがキリストに出会った時、その瞬間、これまで自分自身が価値を置いていたすべてのものを「ちりあきた」と思うようになったと言います。かつては、律法やユダヤ人の慣習を守ることで自分は救いを得られると信じ、熱心にその行いによって神の義を求めていたパウロ、その彼がキリストを信じる信仰による神の義、それによってのみ神の前に認められるとそのことに気付いたとき、パウロはキリストの前にへりくだり、そして、このキリストを自分の救い主として受け入れた訳です。自分の行ないでは決して返すことのできないほどの負債を、イエス・キリストは十字架上で流されたその血潮によって贖ってくださった。イエス・キリストは十字架の上で救いのわざを成し遂げてくださったと、このすばらしいみわざを知識ではなく体験を通して知ったパウロは、自分の人生は完全に変わったと言っています。

そして、この変化は決してパウロだけのものではありません。パウロが特別だったのではなかったことを私たちは見ました。もし、私たちひとり一人が本当に救われているのなら、もし、私たちがキリストのすばらしさを知っているのであれば、その人の人生、その人の生き方は必ず変わるということですから。なぜ、変わるのでしょうか？それは自分が自分を変えるからではないからです。神があなたを変えるからです。だから、その人の生き方は変わるのです。

だからこそ、これまで私たちが持っていたもの、価値を置いていたものに対して、それらはすべて「損」だと思えるようになるのです。そして、キリストにのみ価値を見出すという、そのような生き方へと変えられると、そのことを前回、4-9節の中で見たのです。

今回はその続きです。前回見ることができなかった3章の10節と11節をもう一度見てください。ここには後につながる大切なことをパウロは記しています。「:10 私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり、:11 どうにかして、死者の中からの復活に達したいのです。」、皆さん、パウロはここで何を言わんとしていたのでしょうか？日本語の訳では少し分かりにくいかもしれないので、この箇所の英語訳を見ましょう。「私の目標、もしくは、私が望むことはキリストを知ること、その復活の力を知ること、また、キリストの苦しみに与ることを知ること、キリストの死と同じ状態になり、どうにかして死者の中からの復活に達したいのです。」と、このようになっています。この箇所のポイントはこういうことです。キリストを信じる信仰によって、キリストの中にある者として認められたパウロは、その信仰のゆえに人生における新しい目標を見出すようになったということです。では、その目標は何だったのでしょうか？

◎救われたパウロの生き方が示す新しい三つの目標 10-11節

それらは10節に記されています。一つ目は「私はキリストを知りたい」、二つ目に「私はキリストの復活の力を知りたい」、そして、三つ目に「私はキリストの苦しみに与ることをより知りたい」と、パウロは信仰のゆえにそのような願いを抱くようになったと言います。別のことばで言うなら、キリストによって義とされ変えられ新しくされたパウロは、新しくされたその生き方にふさわしい歩みをするようになったということです。パウロの願いを見ていきます。

1. キリストを知りたい 10a節

パウロはキリストが成されたその十字架のすばらしいみわざを知りました。そのことを味わった訳です。その彼が願うのです。私はダマスコへの道にあってイエス・キリストに出会い、そして、彼のことを少し知り、それによって変えられたけれど、でも、まだまだキリストについて知らないことが多すぎるから、もっともっとキリストを知っていきたくと。

2. キリストの復活の力を知りたい 10b節

パウロは自分自身の救いのときにキリストの復活の力を体験していました。ローマ書6:4でこのように記しています。「私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにおいて新しい歩みをするためです。」と。また、エペソ2:4-5aにも「:4 しかし、あわれみ豊かな神は、私た

ちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、5 罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、」と記しています。かつて、救われる以前のパウロは靈的に死んでいました。皆さんも知っているとおりに、死体に何を話しかけようが、死体に触ろうが、呼びかけようがその死体は決して反応することはありません。同じように、靈的に死んでいたパウロは、自分がどんなことをしようとも決して神の前に義と認められることはなかったのです。死んでいたゆえに何もできなかった、そんなパウロに死に勝利され復活されたキリストが新しい歩みを与えられたのです。死んでいたパウロはキリストにあって新しいのちを得ることができたのです。それを可能にした復活の力というものをパウロはよく知っていたのです。

そして、パウロがキリストにある新しい歩みをして行こうとするときに、この復活の力が欠かせないものであることを知っていました。皆さんもよくご存じのように、ローマ書7章の中にはパウロが罪と葛藤している様子を見ることができます。日々罪との葛藤の中でパウロは、自分には勝利されたこのキリストの力が必要なのだ、むしろ、その力がなければ私は罪に勝利することはできないと、そのことを知っていたゆえに、パウロは新しい歩みをするに当たって、私はもっとこのキリストの力を、復活の力を知りたいと願ったのです。

3. キリストの苦しみにあずかることを知りたい 100-11節

パウロはⅡテモテ3:12にこのように記しています。「確かに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。」、パウロはキリストに忠実に歩もうとするときに、苦しみは避けられない現実であるということをよく知っていました。でも同時に、苦しみを受けるということが、キリストに忠実に歩んでいることの証であることもよく分かっていました。イエスはこのように言われました。ヨハネ15:20「しもべはその主人にまさるものではない、とわたしがあなたがたに言ったことばを覚えておきなさい。もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害します。もし彼らがわたしのことばを守ったなら、あなたがたのことばをも守ります。」と。パウロは「私はキリストの信仰ゆえに今苦しみを経験している。でも、それはキリストご自身が受けられた苦しみと全く同じだ。今確かに、自分は信仰ゆえに苦しみを受けているけれど、それはキリストの通ったその足跡を自分が通っているからだ。」と言うのです。そして、キリストが勝利されたように、自分もいつの日かこのキリストにあって勝利することができる、キリストにあって勝利を味わうことができると、このことを確信していたゆえにキリストによる今の苦しみは彼にとって特権であったのです。だからこう願ったのです。私はもっとキリストの苦しみを知りたい、キリストの苦しみを通してよりキリストを知りたいと。

パウロはこのような目標を持って歩む者へと神によって変えられました。パウロは自分に課せられた信仰のレース、新しい目標を持って走るというその信仰のレースを忠実に最後まで走り切ったのです。私たちが覚えなければいけないのは、パウロが特別だったということではないということです。歴史を振り返れば、どんな時代にあっても信仰の勇者と呼ばれる人たちはパウロと同じ目標を持って歩み続けていました。ある者は嘲笑され、暴行を受け、剣で斬りつけられ、火の中に投げ込まれ、ある者は十字架に掛かりました。しかし、彼らはその死の最後の最後まで、パウロが歩んだように同じ目標を持って忠実に走り切ったのです。そして、皆さん、私たちが覚えなければいけないことは、この歩み方こそがキリストのすばらしさを知り、変えられた者の人生だということです。

何度も言いますが、キリストによって救われた者は必ずその人生が変わります。そして、どんなステージのクリスチャンであっても、私たちがキリストによって救われ歩んでいるなら、必ず、パウロと同じ目標を持って今歩んでいるはずです。そのことをヘブル12:1でこのように書かれています。「こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。」と。聖書が教えることは明白です。もし、あなたが真のクリスチャンであるなら、あなたもパウロの走った信仰のレースを今走っているのだ。あなたもパウロが持っていた新たなる目標を持って今歩んでいるのだということです。

ここまで見て来て皆さん、ある人はこのように思っているかもしれません。「確かに、私はそのようにして生きていきたいけれど、それは自分にとって余りにも難しすぎる。私もパウロのように生きていきたいけれど、どうすればパウロのように生きていけるのだろうか…」と。もしくは、今自分が置かれている状態が余りにも暗く、余りにも苦しいがゆえに希望を見出すことができない、そのような人がこの中にいるかもしれません。そんな皆さんに覚えておいて欲しいことは、神がこのように言われていることです。「私たちひとり一人もパウロが歩んだような歩みをするのが可能だ。」と。

確かに、この生き方は多くの試練や困難を受けるものでしょう。簡単ではありません。しかし、私たちがパウロが歩んだように生きていくことができるのです。では、どうすればパウロが歩んだように生きていけるのでしょうか？次にそのことをともに学んでいきましょう。

◎パウロのように忠実に最後まで走り切るための四つの秘訣 12-14節

この箇所に、パウロのように忠実に最後まで走り切るための四つの秘訣を見ることが出来ます。パウロはこのように教えています。

1. 正しい心構えを持つ 12 a b、13 a 節

12節「私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕らえようとして、追求しているのです。…:13 兄弟たちよ。私は、自分はすでに捕らえたなどと考えてはしません。」、パウロは繰り返して自分がまだ不完全であると言っています。パウロがここで言わんとしたことは「私はキリストのすばらしさを味わいそれによって人生が変えられたけれど、同時に、キリストの知識がまだ完全でないことをよく分かっている。」ということです。ですからパウロは「私はまだ完全ではない。私はまだ知らないからもっとよく知りたい」と、そのことを願い続けたのです。パウロは自分が信仰のレースにあってどこにいるのかをよく分かっていた。パウロはまだ自分がゴールからかけ離れた存在であることをよく理解していたのです。だからこそ、パウロは正しい心構えを持っていました。

自分はレースを走り始めたけれども、まだゴールは先にある、まだ私は不完全だと言います。だから、続けて「ただ捕らえようとして、追求しているのです。」と言っています。この「追求する」とは「何かを熱心に追い求めている人の様子を表わすことば」です。そのことばが使われているのです。皆さんも想像してみてください。例えば、陸上の競技大会で1位になろうとしているランナーの様子、周りのことなど全く気にしないでただゴールだけを目指して、全身を使って一生懸命に走るランナーを…。熱意を持ったランナーのその姿を想像するとき、パウロも自分がゴールからかけ離れている、まだレースの過程にいと、そのことを知っていたパウロはそのような熱い思いを持って日々歩み続けていた、立ち止まることなく走り続けていたのです。パウロがキリストを知ることにかけていた情熱は決して生ぬるいものではなかったのです。「どうにかして私はキリストのことを知りたい」と、そういう思い、心構えを持っていたのです。

問題は、では、私たちはそのような心構えを今持っているか？ということです。残念ながら、ある人は自分があたかももうゴールに到達してしまったかのように、ゴールラインを通り過ぎてしまったかのように考えてしまっています。当たり前ですが、ゴールラインを通り過ぎてしまっていたらその人はもう走ることをしません。ある人はもう自分が置かれている状況に満足してしまっています。ですから、みことばに対して、また、キリストにより似た者になっていくことに対して全く熱意はがないのです。自分はもうゴールに達しているから必要ないと言います。

皆さん、自分自身に問い掛けてみてください。皆さんは日々キリストをもっと知りたいという思いを持って歩んでいるのでしょうか？もっと言えば、キリストを愛するゆえに、聖さを求め日々罪を憎む思いが増し加えられているのでしょうか？ヘブル12：14にこのようにあります。「すべての人との平和を追い求め、また、聖められることを追い求めなさい。聖くなければ、だれも主を見ることができません。」と。ここにいるひとり一人、だれひとりとして例外なく私たちはまだ完全ではありません。私たちはまだゴールにたどり着いていないのです。パウロはキリストを知ったその日から、ただ熱心にキリストにお会いしてキリストにあって完全にされることを夢見て走り続けていた人物でした。私たちもこのような心構えをまず持たなければいけないのです。

2. 歩みを可能にしてくださる方を信頼する 12 c 節

12節の続き「…そして、それを得るようとキリスト・イエスが私を捕らえてくださったのです。」、二つ目の秘訣は「歩みを可能にしてくださる方を信頼する」ということです。パウロは信仰のレースを走っていくに当たって、正しい心構えを持っていただけではありません。自分の歩みの基盤がどこにあるのかがよく分かっていたのです。だから「キリスト・イエスが私を捕らえてくださった」と言いました。

「今、私が信仰のレースを走ることができるのも、その源はキリストが自分の罪を赦し、救いを与えてくださったそのゆえである」と。キリストがこんな罪人である私を救い、義と認めてくださったそのゆえに、今、私は救われた者としての歩みができているのだと言うのです。

同時に、パウロは神ご自身がなぜ自分を救ったのか、その目的をも知っていました。テトス2：14「キリストが私たちのためにご自身をささげられたのは、私たちをすべての不法から贖い出し、良いわざに熱心なご自分の民を、ご自分のためにきよめるためでした。」と。大切なことなのでもう一度よく覚えてください。「『神の義』とは、それを受け入れた人の生き方に神の聖さを追い求めるという願い、行動を生み出すということ」です。ですから、恵みによって救われた人は、ただ単に、180度方向転換するだけでないのです。神の義に生きるという願いを神が与えてくださるから、キリストに似た者になっていきたいという歩みをし始めるのです。これが聖書が教える「聖化」です。もし、私たちが本当に救いが与えられて日々の歩みをしているのであれば、同じ責任が私たちにも与えられているのです。キリストの聖さを日々追い求めていくという責任が私たちひとり一人には与えられているのです。でも、もしこれ

が自分の努力だけでそのことをしなければならぬとすれば、私たちは決してそれをする事ができません。

皆さん、ご自分の生活を振り返ってみてください。どれだけ私たちは罪との葛藤を日々経験しているのでしょうか？神が喜ばれることをと願いながら、私たちはどれ程自分の欲を優先させるようなことをしているのでしょうか？これが神が喜ばれることだと分かっているながら、私たちはどれ程それとは違うことをしているのでしょうか？「これ位なら大丈夫だろう」と自分で判断して罪に陥るといふ経験をしているでしょう、経験したのでしょうか？ある牧師がこのようにまとめています。「私たちは罪を犯すから罪人ではない。罪人だから罪を犯すのだ。」と。私たちは生まれながらに罪を愛している。だから私たちは罪を犯すのだということです。

でも、感謝なことに、私たちは自分の力だけでこの信仰の歩みを歩んでいるわけではありません。私たちは信仰の歩みにおいて、私たちが罪の支配から救い出してくださった力ある神が私たちとともに歩み私たちが助けてくださる。全能なる神があなたが歩むときに助けをしてくださる。その歩みを可能にしてくださる。だから、パウロはこう言いました。ピリピ2：12-13「12 そういうわけですから、愛する人たち、いつも従順であったように、私がいるときだけでなく、私のいない今はなおさら、恐れおののいて自分の救いの達成に努めなさい。13 神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださるのです。」、私たちが新しい目標を持って歩んでいこうとする時、その歩みを可能にしてくださるのは神だと言います。私たちに何か力があるからこのような歩みをしていくことができるわけではありません。神があなたを助けてくださる。だから、私たちも同じように歩んでいくことができると言うのです。

3. 一点に焦点を絞る 13b節

13節「…ただ、この一事に励んでいます。」と、パウロが言わんとしたことは明白です。私たちがレースを走るとき、私たちは一つのことに集中しなければいけない。言い換えれば、私たちは走るときただゴールだけ、その1点だけを目指して走り続けることが必要だということです。当たり前ですが、もし皆さんがランナーを見かけてそのランナーが周りをキョロキョロと見ていたら、皆さんは「まっすぐ前を見て走りなさい」と声を掛けるでしょう。もし、小さい子どもが親のことを気にしながら周りをキョロキョロして歩いていたら、「ちゃんと前を見て歩きなさい」、どこかに引っ掛かってこけるかもしれないから、皆さんは声を掛けると思います。しっかりゴールを見て歩んでいなければ絶対に正しいコースに居続けることができないからです。

そして、もしキョロキョロして間違っただに紛れ込んでしまったとき、ある人は道に迷っていることを気付かないでそのまま歩み続けてしまうかもしれません。ですから、ランナーにとってゴールだけを見て走るとは当たり前ですが最も大切なことなのです。だからこそ、パウロは「キリストを知る、ただその一つのことだけを目指して走り続けていたのです。問題は、私たちはそのように歩んでいるか？」ということです。私たちはゴールだけを見つめて歩んでいるかどうかです。私たちの世界、生活を見渡すときに、私たちの周りには多くの誘惑があります。すばらしいもの、良いもの、便利なものが私たちの周りには溢れています。皆さんも時に、そういった良いものが自分の目を曇らせてしまうことを経験したことがあると思います。ある人にとってはそれはお金かもしれません。携帯かもしれません。テレビかもしれません。食べ物かもしれません。また、趣味かもしれません。自分に問い掛けてみてください。「私の生活の中に自分の目をキリストから奪ってしまうものがないか？」と…。先に挙げたいろいろなものは悪いものではありません。それらは罪でないかもしれません。しかしもし、それらが私たちの目をキリストから除いてしまうのであれば、私たちがそれらをキリストよりも愛してしまうのであれば、私たちの焦点はズレていると言えます。一点を見て走ってはいないと言えます。

だからこそ、私たちはそういうものから自分を守らなくてはならないのです。あなたの目はただ一つのゴールを目指して今歩んでいるのでしょうか？ただキリストを知る、そのことだけを目指して走り続けているのでしょうか？それとも別の物に目を奪われていないのでしょうか？そのことを私たちは考えなければいけないのです。

4. 報酬を追い求め続ける 13c-14節

13節「…すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、」、14節「キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。」、ここで注目して欲しいポイントが二つあります。

1) レースを走るとき、うしろのものを忘れること

私たちがレースを走る時、まず後ろのものを忘れなければいけない、言い変えるなら、私たちはこれまでの過去を前に進み続けるために意図的に忘れなければいけないということです。自分の過去に縛ら

れていてはいけないのです。当然ですが、過去の記憶をすべて抹消することはできませんが、ここで言わんとしていることは、過去のことを意図的に忘れて前に進み続けなければいけないということです。具体的にパウロの例を見て考えてみましょう。もし、パウロが過去に捕われているような人物であったなら、パウロは自分のして来た多くのことを誇ることができました。この「ピリピ人への手紙」を書いたパウロは、この手紙を書くまでに20年もの間キリストの弟子として忠実に歩み続けていたのです。ですから、自分の過去を指して「私はこんなことをして来た。私たこんなにも多くの人を導いて来た。」と、容易に自慢することはできました。しかし、パウロはそんなことをしなかった。それはパウロの目が後ろではなく、前を向いて歩み続けていたからです。パウロにとって過去に何をしたかということは興味がなかったのです。前を向いて走り続けていたのがパウロだったのです。

またもし、パウロが過去に捕らわれているような人物であったとしたら、今度は反対に、自分が今までして来たことについて打ちひしがれていたかもしれませぬ。思い出してください。パウロはクリスチャンを熱心に迫害するような人物でした。自分がこれまで犯してきた罪の大きさを思って罪悪感に苛まれておかしくなかったのです。でも、パウロはそれすらもしませんでした。なぜか？パウロの目が常に後ろのものではなく前を見て走っていたからです。もちろん、彼の心の中には罪悪感があったことでしょう。しかし、それ以上に、神が彼に与えたそのキリストのすばらしさのゆえに、そのすばらしい救いのゆえに、日々感謝して歩んでいたのです。パウロにとって後ろのものはどうでも良かったのです。常に日々神に感謝しながら前を向いて歩み続けていく、それだけで私は十分なのだと言うのです。

問題は私たちがどうか？です。残念ながら、よくこんなことを耳にします。「私は20年の間キリストの〇〇の働きに携わって来ました。」「私はクリスチャンになって聖書を何十回も読みました。」「こんなにも多くささげました。」「私はこんなことをして来ました。」と。また逆に、自分がこれまで犯してきた罪の罪悪感に苛まされている人がいるかもしれませぬ。「クリスチャンなのに酷い罪を神の前に犯してしまった。こんな私など決して赦されることはない」と、そんな罪悪感に打ちひしがれている人がいるかもしれませぬ。どうか、パウロのメッセージに耳を傾けてください。あなたが過去にしたことはもちろんすばらしいことです。あなたが今までどれ程忠実に歩んで来たかということはずばらしいことです。しかし問題は、今、あなたは神に対して忠実に歩んでいるか？ということ。今、あなたは神に救われた時と同じ熱意、情熱をもって主に仕えているか？ということ。今、あなたはキリストのすばらしさを知り、そのとき抱いた初めの愛をもって神を愛し人を愛しているか？ということ。

確かに、私たちは罪の性質をもっているので過ちを犯します。そして、それに打ちひしがれることもあります。しかし、覚えておかなければいけないことは、恵み豊かな神は必ず心から悔い改める者、心から赦しを乞う者を受け入れてくださるということです。だから、決して私たちは過去に捕われ続けていてはいけないのです。前を向いて走り続けなければいけないのです。

2) レースを走るとき、ひたすら前に向かって進み続ける

二つ目のポイントは、今度は「前に向かってひたすら進み続ける」ということです。信仰のレースというのはゴールラインのないレースではありません。このレースには必ずゴールがあるのです。そして、その最後のゴールには必ず神からの報酬が待っているのです。必ず、私たちはキリストと顔と顔を会わすその時がやって来るのです。Iヨハネ3:2でヨハネはこう言っています。「愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現れたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。」と。

キリストにお会いし、キリストに似た完全な者と私たちがなる時、そこにはもう苦しみや悲しみはないのです。そこにはもう涙はないのです。それ以上に、キリストとともにいることの喜び、キリストとともにいることの平安、それらが私たちには用意されていると、そのことを知っていたパウロはその報酬だけを目指して、それを楽しみにしながら、その日を心待ちにしながら日々前を見て歩み続けていたのです。

兄弟姉妹の皆さん、私たちの信仰のレースは難しく辛いものかもしれません。私たちが初めに見たようにそれは苦しみを伴うでしょう。また、あなたはあらゆるものを犠牲にしなければいけないかもしれません。自分の財産だけでなく家族や友人を失うかもしれません。罪との葛藤を経験するでしょう。多くの間違いを犯し、あるときには自分のレースの先には何の希望もないというような状態に陥るかもしれません。そんなとき、どうかパウロが言ったことばを覚え続けてください。「信仰のレースには必ずゴールがある。このレースの最後には必ず報酬がある。そして、あなたがそのゴールラインを切るときあなたにはその報酬が与えられる。そして、何より神ご自身があなたと走ってくださる。」と。ヤコブの手紙1:12を見てください。「試練に耐える人は幸いです。耐え抜いて良しと認められた人は、神を愛す

る者に約束された、いのちの冠を受けるからです。」、ゴールは必ずやって来ます。そして、忠実に走り切ったその者には、必ず、神がその忠実さにふさわしい報いを与えてくださるのです。私たちひとり一人の責任は、ひたすら前を見てこのゴールを目指して走り続けていくことです。

終わりに、パウロはピリピの人たちにこのような命令を与えています。

◎まとめ 15-16節

15-16節「:15 ですから、成人である者はみな、このような考え方をしましょう。もし、あなたがたがどこかでこれと違った考え方をしているなら、神はそのこともあなたがたに明らかにしてください。:16 それはそれとして、私たちはすでに達しているところを基準として、進むべきです。」

パウロは、最後まで走り続けるその秘訣を教えた後、私が今そのように走っているようにあなたがたも同じように「私を見倣って歩みなさい」と、そのようにピリピ教会の人たちを励ましたのです。これは今日私たちにも与えられている同じ命令です。キリストのすばらしさを知って、キリストの義によって生き方が変えられたその人、その人たちは主にお会いするその時まで、信仰において成長し続ける、聖さを追い求め、キリストに似た者になることを願って日々生きていく、そのような責任があるので

す。

今日、もし、この中にキリストのすばらしさを知らない方がおられるなら、どうか今日帰るまでにそのキリストのすばらしさを知ってください。あなたの人生を根本的に変える力がキリストにはあるのです。そのすばらしさを今日知ってください。また、もし、この中にキリストのすばらしさを知っていると

言いながら、知っていながら、パウロが持っていた新しい目標を持って歩んでいない人がおられるなら、パウロが15節で言ったように、神が聖書を通してその間違いをあなたに明らかにして、また再びキリストのすばらしさを知って、そのすばらしさを追い求めて歩む者へと再び帰って来られることを祈っています。

そして最後に、今そのようなキリストのすばらしさを知った人生を歩み続けている皆さん、どうぞ、歩み続けてください。正しい心構えを持って、ただ、ゴールに焦点を絞って、そして、そこに待っているその報酬を覚えて日々歩み続けてください。私たちだけではこんなことはできません。だから、神が私たちを助けてくださる。だからこそ神が言われました。「私たちもパウロと同じように歩むことができる」と。「主に変えられ新たな目標を持って、そのような生き方をしていくことができる。わたしが助けるからだ。」と言われるのです。

皆さん、「良くやった、忠実なしもべよ!」と、最後に主にお会いしたときそのように言っていただけ

けるその時まで、私たちの信仰のレースをともに最後まで走り切りましょう。